

春季リーグ戦で個人打撃成績10位 走攻守そろった嫌がれる選手目指す

ROOKIE

硬式野球部 西銘生悟さん(法学部1年)



◆昨年度「春のセンバツ」で優勝

「初出場の試合は、今までで一番緊張しました」。硬式野球部の期待のルーキー、西銘生悟さんは、東都大学野球春季リーグ戦で1年生ながら2試合目から全ての試合に出場した。計12試合で49打数13安打5打点と個人打撃成績の10位という好成績を残した。

「つつきりこの結果には満足かと思いきや、「思っていた通りではなかったです。もっと相手から嫌

な存在に見られたかったので、もうちょつとはできるかと…」とあくまでも目標は高い。本塁打も2本打ち、長距離ヒッターの片鱗もみせたが、「あれはまぐれです。僕はホームランバッターではないので」と謙虚。身長167センチと小柄な自分の役割をしっかりと感じている。

昨年度の選抜高等学校野球大会(春のセンバツ)で優勝した沖繩尚学の主将としてチームを引っ張った。チームメイトの推薦で主将となり、チームを9年ぶり2回目の優勝に導いたキャプテン

シーについては、「カリスマ性とまとめる力です」と即答した。頼もしい。

◆小学4年からスイッチヒッター

小学校2年生で野球を始めた。4年生になった時、監督から「遊び感覚でいいから左で打ってみなさい」と言われ、気楽に左打ちしてみた。すると、その試合は4打数4安打と当たった。それから、スイッチヒッターになった。

中学では、野球よりは勉強をしていたというが、高校は野球の強い沖繩尚学へ進学。高校時代は、「毎日練習で、休みは年に10日くらい」という野球漬けの日々をおくった。

甲子園で優勝という輝かしい結果を出した西銘さんが、選んだ大学は中大だった。「中大は勉強もできるし、練習環境が整っていると感じたから」という。大学での練習は、平日が朝7時から10時半まで、土日は9時から16時まで練習。その他、空いた時間は各自で練習する。

中大は「文武両道」を掲げているとはいえず、実際、勉強との両立は大変だ。「単位がちゃんと取れるの不安です。授業のとり方も失敗しちやいました」。月曜日に1限から6限までびっしり授業を

とってしまったそうだ。「方向音痴なので、誰かと一緒にないと、いまだに校内で迷います」と初々しい。

◆監督からは「プレーが軽い」と

高橋善正監督からは、プレーについて、よく「軽い」と言われるとか。「横着をしないで、確実にやれっ、ということですよ。プレーが軽いとケガもするし、プロにそういう人はいない、と言われました」。そんな高橋監督について、「うーん」と悩んだ末、「勝負師、です」とのスポーツマンならではの答えが返ってきた。

「高校の金属バットから大学では木製バットに変わり、野球がぜんぜん違います。高校の時より球場が小さく見えます」。飛んでくるボールの速さが違うし、選手の体の大きさが高校生とはぜんぜん違うため、そのように錯覚して見えるのだという。

高校とは選手個々のレベルも高く、スピード感も増している中、今いちばん力を入れているのは、「守備です」ときっぱり。内野手としての使命をしっかり自覚している。攻撃面での自らの役割については、「出塁して、走って、得点を稼ぐチャ

ンスメーカー」と話す。春季リーグ戦では盗塁を4つきめている。「走攻守」三拍子そろった選手だ。

◆東浜投手（亜細亜大）に雪辱を

「期待されるのはとてもうれしい。裏切らないようにしたい」と頼もしい。春季リーグ戦が終わり、沖縄に帰省しても母校で練習するなど努力を

怠らない。

沖縄尚学のチームメイトで昨年春のセンバツの優勝投手の東浜巨投手（亜細亜大学）とは、春のリーグ戦で対戦したが、「4タコでした」と悔しがる。「次には絶対に打つ」と秋季リーグ戦での雪辱に力を込めた。

（学生記者 野村茉莉亜 II 商学部3年）

3年後のロンドン五輪目指す
憧れの入江陵介選手に近づけ

ROOKIE

水泳部 氏林倭人さん（総合政策学部1年）



「大学4年の時にロンドン・オリンピックがあるので、そこを目標にして頑張っていきたいです」。目指すは、3年後のオリンピック出場だ。

「今は1年生だから一番下ですけど、学年が上がっていくごとに、下から尊敬されるような先輩になりたいです」。着実に実力をつけて階段をの

ぼり、目標に到達するという考えは、1年生とは思えないほど堅実で現実を見据えている。

◆インターハイ1000m背泳ぎ優勝

専門は背泳ぎで、周囲からの期待も大きい。大阪・太成高校3年のインターハイで1000メートル背泳ぎのチャンピオンになった。当然、夢は膨らんでくる。

氏林さんが水泳を始めたのは、小学校3年の時。両親がスイミングスクールのコーチをしていたため、「泳げないのはみつともない」と言われ、スクールに通い始めた。2年後、「スクールの選手コースに移らないか」と誘いをうけ、選手コースに移ることを決意した。水泳選手としての道を歩み出したのだ。

小学校6年の時にジュニア・オリンピックに出場するほどの選手に成長した。中学でも水泳部に入部。しかし、部活よりはスクールを重視して日々、練習を重ねた。

高校に進学、水泳部に入り、さらにプールで過ごす生活が深まっていった。高校1年のインターハイでは、決勝に残る活躍を見た。だが、決して順調ではなかった。高校2年の時はインターハ

イで予選落ちをしてしまった。

「去年、決勝にいけたんだから、今年もなんとかなるだろうと余裕を感じていたのが悪かったです」。ちょっとした気ゆるみだったのだろう。しかし、これがよい教訓になり、発憤材料にもなった。

「水泳をやめようと思ったことはないですね。自分には水泳しかないし、3年でインターハイも最後だから、ベストを尽くしたかった」と雪辱を誓った。そのため、コーチと話し合い、ベストが尽くせる環境を用意してもらった。ビデオで自分の泳ぎを見て、練習に励んだ。その成果は、3年でのインターハイ・チャンピオンとして見事に結実した。

◆練習風景みて中大進学決める

中央大学に入ったのは、水泳部の高橋雄介監督からのオファーである。氏林さんの実家は大阪府にあり、東京に試合で遠征した際、ついでに中大を見学した。

「練習風景を見させてもらって、スクールと練習パターンが一緒だったし、先輩たちは本当に優しく、そりゃ強くなるよな」と感じました」と

すぐに中大進学を決めた。

中大での練習は、週10回ほど。朝と昼の練習がある日が、週2、3日ある。「練習は辛くて、早く終わらないかな」と思う時も度々あるが、「辛い時こそ頑張れる選手が、本当に強い選手になれる」というしつかりとした信念を持っている。「絶対に負けたくない。同期にはもちろんだけど、先輩にも絶対に負けたくないという気持ちで、練習にはついていっています」と力強く話した。

唯一のオフは、日曜日。休日は、「先輩と服を買に行ったり、東京を案内してもらったりしています」という。「僕は失敗を引きずってしまいうタイプで、投げやりになり、一週間無駄にしてしまったりますんです。だから、オフに気持ちをリフレッシュすることが凄く大切なんです」と語ってくれた。

◆好物はチョコレートやケーキ

そんな氏林さんは、甘いものが大好き。練習が終わると、チョコレートを食べたり、試合で良い結果がでると、ケーキを買って食べるという。身長180センチ、体重65キロ、均整のとれた筋肉質の身体からは、想像もつかない意外な一面を聞

くことができた。

当面の目標は、50メートル背泳ぎで日本新記録を出すことだ。そうすれば、「尊敬している」という5月の日豪対抗200メートル背泳ぎで世界

記録を破り話題となった入江陵介選手（近畿大学2年）に一步近づくことになる。オリンピックも視野に入ってくる。ガンバレ！氏林さん。

（学生記者 橋本あずさ 法学部2年）

目標は尊敬する藤原正和先輩 何としても「日本一」達成を

ROOKIE

陸上競技部 駅伝 新庄浩太さん（法学部1年）



出身は高校駅伝の名門校・兵庫県立西脇工業高校。その2年次（平成19年）の全国高校駅伝で7区を走り、区間賞に輝いた。高校でのトップランナーは、大学駅伝の伝統校・中央大学の門をくぐった。当然、周囲の期待は大きい。

「箱根駅伝の常連校であること、また期待のさ

れ方が違う伝統校のタスキの重みを背負って勝負をしたい」。大学に入り、練習環境は大きく変わったが、深紅のタスキを胸にかけ、箱根路をひた走る目標に向かって精進する覚悟はできている。

◆中3でジュニア五輪3000m3位

小学生の頃から、地元の市主催のマラソン大会でも上位に入るなど長距離走が得意だった。6年生のとき、駅伝を走り、その面白さに目覚めたという。「タスキをつないでゆくチームプレイ。一人だけの力ではなく、みんなで力を合わせる。それだけに何が起るかわからない。でもそこが駅伝の魅力でもあります」という。

チームメイトの存在が刺激となり、また、励ましとなることで苦しい練習にも耐えられる。そして、ともに努力を積み重ねた仲間と一丸となって戦うところに個人種目とは違った喜びがあるのだろう。

地元の中学に進学した新庄さんは、本格的に駅伝にのめりこんでいく。その中学は駅伝の強豪校で、日本一を目指し練習する日々だったという。中学校の全国大会では、3年間で残念ながら1位になることはできなかったが、3位の成績を残した。

個人種目では、中学3年次に出場したジュニア・オリンピックで、3000m3位という輝かしい実績を挙げている。しかし、「駅伝で日本一になれなかったのが悔しかった」という思いはつづいた。



駅伝の3人はライバル同士だ

◆中高で果たせなかった「日本一」

地元を離れて、高校駅伝の強豪校である西脇工業に進学したのは、日本一になれなかった悔しさを晴らすためだ。しかし、高校2年次に全国高校駅伝で区間賞を獲得することはできたが、ここでも西脇工業を日本一に押し上げることは叶わなかった。

「大学ではなんとしても日本一になりたい」と新庄さんは力を込めた。中学、高校で果たせなかった「日本一」に対する思いは人一倍だ。

「大学が高校と違うのは、練習を自主的にやることです」という。当初はとまどいもあったが、すぐにそれにも慣れた。「練習は水・土・日の週3日はポイント練習といってチームの全体練習を行い、火・木・金は個人での自主練習をしています」。月曜だけはフリーだが、それ以外は毎日走っている。

朝6時から始まる全体練習では、

12、3キロを走り、午後にも全体練習をこなし、それ以外に授業の合間をぬって自主練習をしている。自分でメニューをつくって行う自主練習は、高校にはなかったもので、「先輩の練習の様子から学んでいる」という。

◆いまは基礎体力をつけるとき

大学が高校と何よりも違うのは走る量（距離）だ。高校時代は1日に6000〜8000mだったのが、大学では30〜40kmと数倍に増えた。まるでケタが違う。でも「今ほどにかく練習をこなして基礎体力をつけたいです。夏合宿では走り込みます」と新庄さんは、いま何をやるべきかをしっかり自覚している。

そんなハードな練習の毎日と学業を両立することについては、「大変ですが、大学生である限り勉強をするのも当然です」ときっぱり。「走れるのは年齢がある、引退したあと立派な社会人としてやっていく力もつけなくてはならない」という高校時代の先生の言葉を大切にして、実践しているのだ。

「藤原正和さんを尊敬している」という新庄さん。西脇工業から中大に進学し、箱根駅伝で大活

躍した藤原さんは、新庄さんにとって憧れの先達であり、少しでも近づきたいと目標にする人でもある。

何よりも「走ることが好き」で、好きな言葉は

「忍耐」と答えてくれた新庄さんは、尊敬する先輩に近づいたため着実に歩数を刻みながら“走り”出している。

(学生記者 望月繁樹 II 文学部 2年)

ケガで泣いた高3の全国高校駅伝 悔しさをバネに箱根駅伝を目指す

ROOKIE

陸上競技部 佐々木健太さん(法学部 1年)



「やっぱり4年間、ケガなく走りたいです」。

佐々木健太さんは、「ケガ」という言葉を何度も口にした。アスリートにはケガはつきものだ。だが、佐々木さんが人より以上に「ケガ」を気にするのは、理由があった。

◆ケガと悔しさを残る高校時代

高校は、駅伝の強豪校として全国に名を馳せる佐久長聖高校(長野県)。高校3年生の全国高校駅伝(平成20年12月)の一週間前に大きなケガをして、出場できなくなってしまったのだ。

高校2年生の全国高校駅伝では、6区を走って区間賞に輝き、チームを準優勝に導いた実績があるだけに、3年になり周囲からも期待を寄せられていた。もちろん自分自身も「全国大会で優勝する」ことに全てを賭けてきた。しかし、ケガが高校生活最後の全国大会で走り、優勝したいという「夢」を奪ってしまった。

原因は疲労骨折だった。その時、佐々木さんの高校時代の駅伝が終わった。

出場できなかった全国大会で佐久長聖高校は、初優勝を飾った。しかも、日本高校最高記録という輝かしい結果がついた。周りの選手が初優勝に喜びを爆発させていたなかで、素直に喜べず、悔しさが残らなかった。

「全国大会で走った思い出より、ケガと悔しさが残っています」。高校時代の思い出は？と聞くと、こう答えが返ってきた。

◆目標にする高校の先輩二人

高校時代はずっとケガとの戦いだった。「満足に走れたのは2年生の時だけだった」という。骨折も多く、練習中痛みが引かないと思ったら、折れている時もしばしばあった。「何回もやってい

ると、もうこれは折れているな、とわかるようになった」と笑いながら話をしてくれた。

佐久長聖高校出身で、大学駅伝でめざましい活躍をし、現在とともに社会人で活躍する日本の期待の長距離ランナーである上野裕一郎さん（中大卒）と佐藤悠基さん（東海大卒）が、「憧れの選手であり、目指す選手です」と目を輝かせた。中大を選んだのも上野先輩を慕っていたからだ。

上野さんと佐藤さんに共通するのは、「速さはもちろんですが、自己管理ができて、自主性をしっかり持っていることです」という。「自分も二人みたいに箱根で活躍したい」と先を見据えた。

◆箱根に向け、焦らずじっくり

「高校の時からずっと目指してきました」という箱根駅伝は、高校駅伝に比べ、距離がずっと長くなる。1区間が平均20^分前後という未知の距離だ。「やっぱり不安は不安です。高校の練習で20^分走とかはあったんですが、レースでは走ったことがないので……。だから箱根を走りたい気持ちはあるのですが、ケガが怖いので焦らずにじっくり思っています」と冷静に自分を見据えている。

高校では監督が決めたメニューをひたすら練習

してきた。つらくても休めなかった。その分、無理が重なりケガをしてきた。大学ではほとんど全て自分でメニューを決めて練習をする。「最初は戸惑いましたが、今では自分で調節できるから、自分にはあっているように思うようになりまし

（学生記者 稲瀬正樹 法学部3年）

初の関カレ5000mで19位と健闘 1年生での箱根駅伝出場を目指す

ROOKIE

陸上競技部駅伝 野脇勇志さん（法学部1年）



◆高3のインターハイ5000m12位

5月24日に国立競技場で行われた第88回関東学生陸上競技対校選手権大会（関東インターカレ）の男子1部5000m決勝で19位の成績を残した。記

録は14分10秒13で、箱根駅伝で活躍した強敵が多数出場するなか、ルーキーとして大いに気を吐いた。

野脇勇志さんは、長距離走の選手ならではの細身の身体で、身長もさほど高くはない。顔にはま

だあどけなさが残る。印象は気のやさしい穏やかな少年だ。闘争心は内に秘めているのだろう。

出身は、高校駅伝の強豪校、宮崎県立小林高校。高校3年の時（平成20年）、インターハイの5000m決勝で12位という実績を残している。中央大学へは、「古豪中央の伝統と設備の整った練習環境に魅力を感じました。それに、中央大学文学部出身の父親の勧めもあって入学を決めました」という。

◆中3で走りに飽き、記録落とす

「小学校、中学校では野球をやっていました。野球の練習は、冬は走り込みが中心なんです。それで走る練習をしているうちに、走ることに自体に興味を持つようになりました」

中学に入ってから陸上部に転部、1年生の時に県大会の3000mに出場して優勝した。しかし、中学校に駅伝部はなかった。ある時、評判を聞いた駅伝部がある他校の陸上部監督から誘いを受けた。そこで、上のレベルを目指して転校した。

だが、競技生活は順調にはいかなかった。「転校して2年生の時は一生懸命頑張って練習していました。だけど、3年生になると走ることに飽き

てしまつて練習が面倒臭くなつてしまいました」。その結果、記録は伸びなくなった。全国大会の標準記録に及ばず、大会出場を逃した。

中学校では走ることへのモチベーションを失いかけた野脇さんは、高校駅伝で全国に名の知れた小林高校に進学すると変わった。

◆夏合宿で走り込み、距離延ばす

「高校では寮に入り、強い選手や厳しい監督の下で練習していくうちに、自分には駅伝しかないと思うようになりました。それからまた一生懸命に練習するようになり、記録も伸びるようになりました」。練習は辛くても、「ゴールしたときの達成感や記録を出したときの喜びがたまらない」と長距離走の魅力に惹かれるようになっていった。

大学は古豪・中大を選び、「箱根にはもちろん出たいと思っています。できることなら来年の正月に走りたいのですが、1年生なので正直わかりません」と目標を見据えている。そのためまずは、「秋までに5000mを13分台で走れるようになる」ことを目指す。箱根駅伝で走る20km以上の長距離は、高校では走ったことがない未知の距離だ。「夏合宿で30kmを走る練習があるので、それまで

に少しずつ距離を延ばしていきたい」と考えている。

◆ライバルがいる早稲田には勝つ

ライバルは？と聞くと、「早稲田大学の前田悠貴を意識しています」という返事。同じ小林高校出身の仲のいい友人と一緒に遊びに行ったりもするという。「関東インカレでは自分が勝つたのですが、高校時代から勝つたり負けたりで、高校駅伝ではエース区間のポジションを争っていました。箱根駅伝では彼にも早稲田大学にも絶対に勝ちたいです」と力強く宣言した。

（学生記者 伊藤知広Ⅱ経済学部4年）

